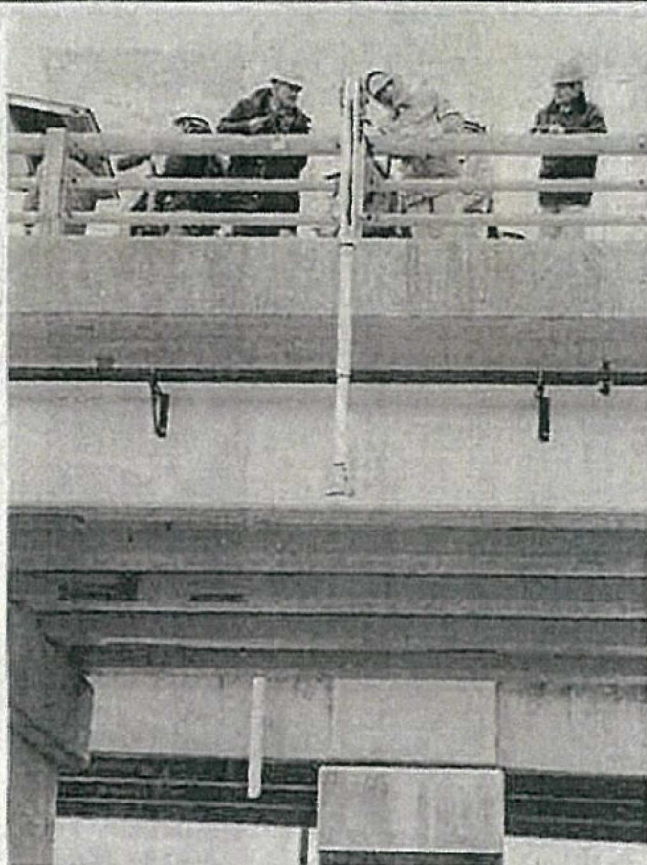


ロボット活用しインフラ点検

長崎大大学院工学研究科インフラ長寿命化センターは27日、西海市の中戸橋（長さ約1833m）で、インフラを維持・管理するために必要となるロボットや情報などの技術を活用した点検、診断の実証試験を実施した。



ロボットカメラを使って橋の裏側の状況を確認する参加者
—西海市、中戸橋

西海 長崎大が実証試験

橋やトンネルなど戦後の高度経済成長期に建てられたインフラの老朽化が全国で進む中、事故防止、維持管理やメンテナンスの負担減、作業員の安全確保などを図ろうと、内閣府は現在「戦略的イノベーション創造プログラム（SIP）」を進めている。

SIPには11の課題があり、その一つ「インフラ維持管理・更新マネジメント技術」に昨年8月、同大の研究開発が採択された。この一環で、同大は2019年3月まで、沖縄を除く九州各県と山口県のエリアで、ロボットやカメラ、通信などの最先端技術を使ったインフラの維持管理方法の普及啓発に努める。

この日の実証試験には、県内外の大学教員や土木関係者ら約50人が参加。1961年完成の中戸橋をモデルに、小型無人機ドローンや橋の柵に掛けて下に垂らすロボットカメラを使って橋の裏側のひびや空洞、剝離などを発見する技術や、25トクレーン車が橋を渡る前と通過中の動画や静止画を撮影してたわみを点検する技術などを確認した。

同センターの松田浩センター長は「ロボットなどの技術を使えば、危険な場所での作業も減り、楽に正確な点検、診断ができるようになる」と話した。

同センターは今後も、トンネルや斜面地などでも実証試験を実施する予定。（小槻憲吾）